社会福祉法人　児童養護施設
花園精舎
HANAZONO SEISHA



ANNUAL JOURNAL / 2024

# HANAZONO JOURNAL

子どもたちとともに紡ぐ、一年の記録。



2024

社会福祉法人 花園精舎
ANNUAL JOURNAL

CONTENTS

# この一年の、小さな一歩。

令和6年度の活動を振り返って


03 ごあいさつ
施設だより発刊に寄せて

04 新入園・入学お祝い会
新たな門出を祝って

05 春の小学生キャンプ
自然の中で発見する楽しさ

06 子ども祭り
友達と過ごす、特別な一日

07 中高生旅行
蒜山方面への二日間

08–09 夏のキャンプ
大冒険と、参加者の声

10 合同運動会
手話とダンスでつながる

11 USJ職業体験
人を楽しませる仕事を学ぶ

12 クリスマス会
笑顔と成長が輝いた一日

13–14 施設内研修
マニュアル／子どもへの支援

15–17 施設内研修
ライフストーリー／権利擁護

18 ご支援への感謝
寄付・寄贈のご報告

19 巻末のご案内
編集後記・苦情申し出窓口

20 お問い合わせ
施設所在地・連絡先


本誌の写真・掲載情報は、令和6年度の原本に基づいています。
表紙・裏表紙は、日常の遊びやつながりをイメージした生成画像です。

MESSAGE

# 安心できる場所を、ともに。

施設だより発刊に寄せて



社会福祉法人 花園精舎

**理事長兼施設長　照井眞哉**

施設だよりをご覧の皆さまへ。平素より、当施設の活動に温かいご理解とご支援を賜り、心より感謝申し上げます。この1年間も、地域の皆さまや関係機関のご協力のもと、子どもたちが安心して暮らせる環境づくりに努めてまいりました。

振り返れば、令和6年度も子どもたち一人ひとりが成長し、それぞれの可能性を広げる姿に心を打たれる瞬間がたくさんありました。新たに迎えた子どもたちが少しずつ笑顔を取り戻す姿や、これまで努力を続けてきた子どもたちが目標を達成する姿は、私たち職員にとって大きな喜びであり、励みでもあります。

令和7年度を迎えるにあたり、「第3期東大阪市子ども・子育て支援事業計画」が始動します。この計画では、「こどもまんなか社会」の実現を目指し、すべての子どもたちが健やかに成長できる仕組みが整備されます。当施設もその理念に賛同し、社会的養護の現場から地域社会との連携をさらに強化しながら、子どもたちの未来を支えてまいります。

私たちの施設では、日常の生活を通じて子どもたちが自信を持ち、自分らしく歩んでいける力を育むことを大切にしています。子どもたちにとって「ここは安心していられる場所だ」と感じられるような居場所を提供し続けるために、引き続き皆さまの温かなご支援をお願い申し上げます。

最後になりますが、令和7年が皆さまにとって幸多き一年となりますよう心よりお祈り申し上げます。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

2024.04.06

# 新たな門出を、祝って。

新入園・入学お祝い会と焼肉会









於：焼肉キング瓢箪山店

新入園・入学を迎えた子どもたちを祝うお祝い会の後、私たち職員と子どもたちは焼肉キングへ向かいました。この日を心待ちにしていた子どもたちは、「僕はお肉しか食べない!」「誰と一緒に食べるのかな?」と、期待に胸を膨らませながらお店へ向かいました。そんな楽しそうな声が飛び交うなか、みんな笑顔で店内へと入りました。

初めて焼肉店を訪れる子どもたちもおり、タッチパネルの操作に戸惑う様子も見られました。しかし、職員がサポートしながら一緒にメニューを選ぶことで、次第にその時間を楽しめるようになりました。自分の食べたいものを注文できる喜びを感じる子どもたちの表情は、とても生き生きとしていました。注文後、まずは職員が焼き台の前に立ち、お肉を焼き始めました。

じゅうじゅうと音を立てて焼けていくお肉に、子どもたちは目を輝かせながら待ちきれない様子。「まだかな?」「いい匂いがする!」と、期待感いっぱいの声があちこちから聞こえてきました。食事が始まると、子どもたちは思い思いに焼肉を楽しみ、お腹いっぱいになるまで味わいました。そして、自分たちでもお肉を焼く機会を得ると、その楽しさに夢中になりました。

自分で焼いたお肉を職員に「おいしい!」と言われると、嬉しそうに笑顔を見せる場面もありました。食事を通して、ただお腹を満たすだけでなく、自分で選び、調理し、誰かと分かち合う楽しさを体験する貴重な時間となりました。この食事会は、子どもたちだけでなく、私たち職員にとっても特別な時間でした。一緒に食卓を囲みながら過ごすひとときは、子どもたちとの絆を深め、温かい気持ちを共有できる貴重な機会です。

新しい環境へと踏み出す子どもたちの心には、不安や緊張があるかもしれませんが、こうした楽しい経験が、少しでもその不安を和らげる助けになればと願っています。私たち職員は、これからも子どもたちが安心して新しい環境に順応し、成長していけるよう、全力で寄り添い、支えていきます。これからも子どもたちの笑顔があふれる時間を大切にしながら、一緒に歩んでいきたいと思います。

記：児童指導員 川村

2024.05.02–03

# 自然の中で、発見する。

春の小学生キャンプ



三重県／赤目四十八滝キャンプ場 ｜ 児童16名・職員8名

春キャンプは、子どもたちにとって毎年楽しみにしている行事です。毎年4月の中旬になると、キャンプを心待ちにしている子どもたちの様子が見られ、質問が増え始めます。「先生、誰が来るの?」や「大きい水鉄砲持って行っていい?」など、期待に胸を膨らませているのが伝わってきました。こうした姿を見ると、子どもたちに楽しんでもらえるように準備を頑張ろうという気持ちになります。

キャンプ場に到着すると、子どもたちはさっそく川や陸での遊びに夢中になりました。川遊びでは、水鉄砲で遊んだり、網で川の生き物を捕まえようと一生懸命探索しました。高学年の子どもたちは川の上流へ行き、オオサンショウウオを見つけたり、ユニークな木を見せ合ったりしながら、自然の中での発見を楽しみました。途中で滑りそうになる子もいましたが、上の学年の子どもが手をつないで助ける姿が見られ、子どもたちの成長を感じる場面もありました。

好奇心旺盛に動き回る子どもたちの姿はとても微笑ましく、また、協力し合う様子を目の当たりにして、仲間との絆を深める良い機会になったと感じました。陸遊びでは、キャッチボールや鬼ごっこ、探検ごっこなど、それぞれ思い思いに遊んでいました。また、「ハイキングをしたい!」という声が上がり、職員とともに山道を歩くことに。

途中、怖い雰囲気のある井戸を見つけると、普段お調子者の子が少し怖がる可愛らしい姿も見られました。山の中で聞こえる鳥のさえずりや木々のざわめきに耳を澄ませる子もおり、自然の豊かさを感じる貴重な時間になったと思います。食事の時間には、高学年の子たちが積極的に料理の手伝いをしてくれました。普段あまり触れる機会のない包丁やピーラーを使いながら、ニンジンやジャガイモを切ったり、お米をといだりしました。

最初は恐る恐るだった子も、慣れるにつれて手際よく作業するようになり、料理の楽しさや大変さを実感している様子でした。「美味しい!」「料理楽しかった!」という子どもたちの声を聞き、次回のキャンプでも一緒に料理を楽しみたいと感じました。夜には職員企画の肝試しを実施しました。高学年と低学年でペアを組み、薄暗い道を抜けて寝袋を取りに行くという内容でした。

低学年の子どもたちは「怖い〜」と言いながらも、どこか楽しそうな表情を見せ、高学年の子たちは「全然怖くないよ」「大丈夫だから頑張ろう」と励ましの声をかける姿が印象的でした。怖がりながらも無事に終えると「楽しかった〜!」と笑顔を見せる子どもたち。中には驚かせすぎて泣いてしまう子もいましたが、全体を通して実施してよかったと感じました。

次回もさらに楽しめるよう、工夫を凝らしていきたいと思います。全体を通じて、子どもたちは自然の中でさまざまな活動を楽しみながら、心身ともに成長する機会を得ることができました。普段の生活では味わえない特別な経験をし、仲間と協力しながらたくさんの思い出を作ることができたのではないかと思います。そして、何よりも無事に事故や怪我なくキャンプを終えられたことを嬉しく思います。

また次回も、子どもたちが楽しみながら成長できるキャンプを企画したいです。

記：児童指導員 佐藤

2024.05.26

# 友達と過ごす、特別な一日。

子ども祭り





場所：花園精舎 園庭

5月26日、花園精舎の園庭にて「子ども祭り」が開催されました。この日は、子どもたちが自分の友達を学園に招待できる、特別な日です。いつもとは違う雰囲気のなか、子どもたちは友達が来てくれるのを楽しみにしながらも少し緊張している様子が見られました。前日から、「ちゃんと来てくれるかな?」とそわそわ落ち着かない様子の子もいれば、「早く一緒に遊びたい!」と心を弾ませる子もいて、それぞれが期待と不安の入り混じった気持ちを抱えているようでした。

友達を学園に招待することで、普段の生活とは異なる特別な体験ができるこのイベントは、子どもたちにとっても大きな意味を持つものになっています。迎えた当日、会場にはたくさんの友達が駆けつけ、開始早々から大いに賑わいました。自分の招待した友達が姿を見せると、子どもたちはパッと表情を明るくし、嬉しそうに駆け寄る姿があちらこちらで見られました。

「来てくれてありがとう!」と笑顔で言葉を交わしながら、次々と会場を案内し、一緒に楽しむ準備は万端。安心したように笑顔がこぼれ、友達と手をつなぎながら歩く姿も印象的でした。輪投げや玉入れ、プラバン作りなどの出し物が用意されており、どのブースもたくさんの子どもたちで賑わいました。輪投げでは「よし、あともう一回!」と熱中する姿が見られ、玉入れでは「あと少しで勝てる!」とチームで協力しながら奮闘する場面もありました。

プラバン作りでは、みんなが思い思いのデザインを描き、出来上がった作品を嬉しそうに見せ合う姿も。どのコーナーでも、子どもたちの楽しそうな笑顔が溢れていました。そして、祭りの目玉の一つであるプレゼント企画では、さらに大きな盛り上がりを見せました。くじを引く瞬間は、どの子もドキドキした表情を浮かべ、結果を見た途端に「やったー!」と喜びの声をあげたり、「あともうちょっとだったのに!」と惜しがる姿も。

お互いの結果を見せ合いながら、「いいなー!」「次は当たるかも!」と友達同士で励まし合う光景が広がり、会場の熱気は最高潮に達しました。イベントの終盤には、友達同士で「楽しかったね」「また一緒に来ようね」と感想を伝え合う場面も見られました。学園の子どもたちにとっては、普段の学校とはまた違った雰囲気の中で友達と過ごすことで、新たな一面を発見するきっかけにもなったようです。

「学校ではこんなことしないよね!」「こんなに遊べるとは思わなかった!」と、いつもとは異なる環境での交流を存分に楽しんでいました。また、地域の小学生を招待したことで、普段施設では見られない新しい関わり方や、子どもたちの違った表情を見ることができたのも、この祭りの大きな収穫でした。年齢や学校が違っても、遊びを通じて自然と距離が縮まり、新しい友達ができるきっかけになったことは、とても素晴らしいことだと感じます。

今回の「子ども祭り」は、子どもたちにとっても、招待された友達にとっても、忘れられない一日になったのではないでしょうか。学園の中だけではなく、地域とのつながりを広げることで、新たな交流の場が生まれ、子どもたちの成長にもつながる貴重な機会となりました。私たちは、これからも子どもたちが心から楽しめる行事を積極的に企画し、より豊かな交流の場を提供していきたいと思います。

来年の「子ども祭り」も、さらに楽しく、さらに思い出に残るものになるよう、今から準備を進めていきます。

記：児童指導員 川村

2024.08.01–02

# 笑顔と成長を紡ぐ、旅。

中高生旅行／自然の中で広がる笑顔



岡山県／蒜山方面　｜　中高生11名・職員4名

旅行初日、眠そうな顔で集合した子どもたちも、出発前には旅への期待で目を輝かせていました。特に電車やバスでの長い移動中は暑さや疲れが出る場面もありましたが、周囲の人に気を配る姿が見られ、学校生活で培った思いやりの心を感じる場面もありました。例えば、疲れている人に「どうぞ」と席を譲る場面では、彼らの成長を誇らしく思いました。

昼食は各自コンビニや売店で購入したものを駅で楽しみました。普段と少し違う環境で食事をすることで、子どもたちは会話を弾ませ、旅の雰囲気を存分に楽しんでいる様子でした。目的地に到着すると「長かった〜!」と声が上がりつつも、「これから何が始まるんだろう?」と期待に満ちた表情が印象的でした。旅館に到着すると、子どもたちはそれぞれ自分のペースで楽しみ方を見つけていました。

部屋でくつろぐ子、お土産を見に行く子、友だちとお風呂を楽しむ子と、多様な姿が見られ、彼らが自分たちで楽しみを創り出す力を持っていることに感心しました。夕食のバイキングでは、好きな料理を選んで笑顔で食べる姿が微笑ましく、特にデザートコーナーでの楽しそうな表情が印象的でした。食事後はカラオケや卓球、読書コーナーなどで自由に過ごし、他の子どもたちと自然に打ち解ける様子から、彼らのコミュニケーション能力の高さに感心しました。

二日目の朝、期待に満ちた表情で朝食を楽しむ子どもたちの姿がありました。この日はメインイベントのリバートレッキングが控えており、彼らの興奮は隠しきれない様子でした。リバートレッキングでは、冷たい川の水に驚きながらも次第に慣れ、「キャー!」という歓声を上げて遊ぶ姿が見られました。手をつないで協力して渡る場面や、花の形を作る遊びをするなど、自然の中でのびのびと楽しむ彼らの姿に、体力や協調性が発揮される瞬間を感じました。

ただ、川辺ではアブが飛んでおり、刺されて「痛い!」と困った顔をする子もいました。それでも互いに助け合い、気を取り直して遊びに戻る姿には、自然体験を通じて困難を乗り越える力が育まれていると実感しました。帰りのバスでは、リバートレッキングで疲れ果てたのか、食事後はほとんどの子どもが静かに寝入っていました。

その寝顔を見ながら、この二日間で彼らが多くの経験を積み、大きく成長したことをしみじみと感じました。「また行きたい!」という声や「楽しかった!」という言葉に、職員としての達成感を強く感じました。今回の旅行では、移動中の思いやり、自然の中での遊び、他の子どもたちとの交流など、さまざまな場面で子どもたちの成長を目の当たりにしました。

彼らが新しい一面を見せてくれたこと、そして無事に全員が楽しみながら帰ってこられたことに心から感謝しています。この経験が子どもたちにとって特別な思い出となり、これからの成長に繋がることを願っています。次回もさらに充実した旅行を企画し、子どもたちの笑顔に再び出会える日を楽しみにしています。

記：児童指導員 佐藤

2024.08.19–20

# 夏の大冒険を、仲間と。

夏のキャンプ



赤目四十八滝キャンプ場 ｜ 児童18名・職員8名

子どもたちにとって夏の楽しみの一つであるキャンプ行事。今年も自然の中で特別な体験ができる夏季キャンプを実施しました。昼間は、川遊びや虫取りなどのアクティビティで大冒険が繰り広げられました。特に夏ならではの冷たい川の水が心地よく、子どもたちは元気いっぱいに川へ飛び込み、水切りや水鉄砲遊びに夢中になっていました。

全身で自然と触れ合う中で、笑顔が絶えませんでした。また、虫取り網を持って昆虫採取に挑戦する姿も印象的でした。普段見かけない虫に大興奮で、「見て!見て!」と声を弾ませながら、自然の中を駆け回る姿がとても楽しそうでした。日中の冒険が終わると、夕食後にはお待ちかねの花火の時間です。手持ち花火を楽しんだり、噴出花火が夜空を彩ったりする恒例の行事は、子どもたちの歓声で賑わいました。

暗闇に映える花火を目を輝かせて見つめる姿や、「またやりたい!」と何度も花火を楽しむ様子が心に残るひとときでした。夜空の星の下、花火を囲む時間は特別な思い出となりました。また、高学年の子どもたちは食事作りにも参加しました。火をおこし、食材を準備し、みんなで協力しながら料理を作る中で、達成感を味わい、笑顔が広がっていました。

自分たちの手で作り上げた料理をみんなで囲んで食べる瞬間は、特別な喜びに満ちていました。このキャンプは、自然との触れ合いや友達との協力を通して、子どもたちにとって貴重な体験の場となっています。また、職員との絆を深める機会にもなり、子どもたちにとってかけがえのない時間を過ごせたことを感じました。毎年キャンプの時期が近づくと、子どもたちの笑顔と楽しみにする姿が私たちにも伝わり、その喜びを共有できることに感謝しています。

今年の夏もまた、たくさんの素敵な思い出が生まれ、一生の宝物となる体験となりました。今後もこのような行事を通じて、子どもたちが成長し、輝く時間をサポートしていきたいと思います。

記：児童指導員 川村

OUR DAYS / VOICES

# この夏の、忘れられない声。

夏のキャンプ／参加した子どもたちと職員の感想



## 子どもたちの声

「川が冷たくて気持ちよかった!」

「花火がきれいだった!また来年もやりたい!」

「みんなで料理を作るのが楽しかった」

「次のキャンプも早く行きたいな!」

## 職員の声

「自然の中で元気いっぱいに遊ぶ子どもたちの姿を見ると、本当に嬉しくなります。」

「子どもたちが協力して料理を作る姿に成長を感じました。」

「花火の時間は、子どもたちと一緒に過ごす特別なひとときでした。」

「キャンプを通じて、子どもたちの新しい一面や成長を見られるのが職員としての喜びです。」

## まとめ

子どもたちはもちろん、職員にとっても学びや喜びの多い時間となった夏キャンプ。今年もたくさんの笑顔と感動が生まれ、心に残る思い出の一つとなりました。来年のキャンプがさらに楽しくなるよう、みんなでまた準備していきたいと思います!

# 心をひとつに、届ける。

第48回東大阪市福祉施設会合同運動会



場所：岩田西小学校

10月20日、澄み渡る青空のもと東大阪市福祉会合同運動会が開催されました。今年も施設職員と子どもたちが心を一つにして繰り広げた感動的な応援合戦が、大きな盛り上がりを見せました。この成功の裏側には、8月から続けられた準備と練習の日々がありました。会議室に集まった職員たちは、今年のテーマとして“昭和・平成・令和をつなぐダンス”を選定。

懐かしさと新しさを融合させた選曲が全員を楽しませることを目指しました。そして、今年新たに“手話”を取り入れるアイデアが加わりました。手話を使った表現には、「多様性と調和を表現したい」という思いが込められていました。練習初日から、子どもたちと職員たちは手話の動きを一つずつ確認しながら振り付けを進めました。

最初は戸惑いの声もありましたが、繰り返し練習する中で自然と笑顔が生まれ、動きが揃っていきました。特にダンス部分では、大きく体を動かす楽しさが加わり、練習場には常に活気が満ちていました。中盤に差し掛かると、曲のリズムに合わせた動きの切り替えや、全員に伝わりやすい表現を意識した調整が本格化しました。職員同士や子どもたちとの間でアイデアを出し合い、「笑顔を忘れないで」「大きな動きで感情を伝えよう」とアドバイスを送り合う姿が印象的でした。

本番直前には、大きなグラウンドでのリハーサルが行われました。「もっと遠くまで伝わるように手を高く上げて!」という声が響き渡り、最後の仕上げに向けた全員の集中力が高まっていきました。そして迎えた本番当日、昭和の懐かしいメロディから始まり、平成、令和へと移り変わる音楽の中で繰り広げられた応援合戦は、手話とダンスの融合が見事に表現されました。

子どもたちと職員が一体となり完成させたパフォーマンスは、全員の心を掴み、グラウンド全体を感動で包み込みました。特に手話の場面では、全員の大きな動きと笑顔が場を盛り上げ、ダンスパートでは軽やかなジャンプと力強い動きがリズムに乗る楽しさを伝えました。結果発表の瞬間、見事に応援合戦で最優秀賞を勝ち取った喜びは、全員の努力を讃える最高の結末となりました。

このアイデアを通じて感じられた絆と成長は、日々の支え合いを象徴するものであり、これからの新たな試みへ向かう力となるでしょう。応援合戦に参加した職員として、子どもたちと一緒に笑い合い、励まし合いながら過ごした日々が特に心に残っています。本番では子どもたちの成長と頑張りを目の当たりにし、私自身も大きな感動を覚えました。

共に目標を達成できた喜びは、忘れられない思い出となりました。

記：児童指導員 川村

# 人を楽しませる、仕事。

ユニバーサル・スタジオ・ジャパン職業体験




場所：ユニバーサル・スタジオ・ジャパン

ユニバーサル・スタジオ・ジャパン(USJ)は、世界中の人々にエンターテイメントと感動を届けるテーマパークとして知られていますが、今回、特別なプログラムとして子どもたちに職場体験の場を提供して頂きました。プログラムの始まりは、USJクルーの心得を学ぶ講義からスタートしました。パークが大切にしている理念や、お客様一人ひとりに「忘れられない思い出」を届けるためのホスピタリティ精神について説明が行われました。

この講義を通じて、子どもたちは、日常生活においても「相手を思いやる心」や「楽しませる工夫」の重要性を教えて頂きました。次に、実践的なトレーニングが行われました。子どもたちは、お客様役とクルー役に分かれ、実際のシナリオを再現。最初は緊張した様子でしたが、講師からのアドバイスを受けるうちに、徐々に自信を持って笑顔で対応する姿が見られました。

特に、「常に笑顔でいること」や「お客様が安心して楽しめるよう心を込めて接すること」が、いかに重要かを体感した様子は印象的でした。これらの体験を通じて、子どもたちはホスピタリティの本質を学び取ってくれたと思います。さらに、ファーストエイド体験では、緊急時のお客様対応について基本的な知識とスキルを学びました。

中でも、車いすを押す練習では、ただの移動手段としてではなく、利用される方に安心感と快適さを提供することがいかに大切かを深く理解しました。角度やスピード、細かいカーブの処理まで、細やかな配慮が求められる場面で、子どもたちは思いやりの大切さを実感したと思います。マーチャンダイズ部門の体験では、商品の陳列、レジ対応、袋詰めといった実務を経験しました。

ただ商品を並べるだけではなく、見栄えや手に取りやすさを工夫することが、売り場の雰囲気を左右することを学びました。また、レジ業務や袋詰めでは、迅速かつ正確な対応が、お客様満足度やパーク全体の印象に直結することを理解。一つひとつの作業に責任を持つことの大切さを感じたようです。職場体験を終えた子どもたちは、その後実際にお客様としてパークを楽しむ時間も与えられました。

クルーの一員として働いた後にアトラクションやショーを楽しむことで、パークの魅力を新たな視点で感じ取ることができたようです。裏で支えるスタッフたちの工夫や努力が思い浮かび、エンターテイメントの奥深さを再認識する機会となったのではないでしょうか。この職場体験を通じて、子どもたちはユニバーサル・スタジオ・ジャパンが単なる娯楽施設ではなく、「特別な一日」を届けるために多くのスタッフが連携して働く大きなチームであることを知りました。

そして、「人を楽しませる」というシンプルながら奥深い目標を達成するためには、相手への思いやりや細部へのこだわりが欠かせないことを学べたのではないでしょうか?この職場体験プログラムが、花園精舎の子どもたちの可能性を広げる契機となることを願っています。

記：児童指導員 川村

2024.12.25

# 一年の笑顔と成長に、拍手を。

クリスマス会



場所：花園精舎本体施設

今年も恒例のクリスマス会が第1部と第2部に分かれて開催されました。それぞれのプログラムが、子どもたちの笑顔と成長を引き出す温かなひとときとなりました。第1部では、伝言ゲームや紙コップスタッキングといったレクリエーションが行われました。伝言ゲームでは、子どもたちの楽しそうな笑顔が印象的で、言葉を伝えるたびに笑い声が広がっていました。

また、紙コップスタッキングでは、一人ひとりが集中し、手先の器用さを発揮する姿に会場全体が感動。応援の声や笑い声が飛び交い、子どもたちのエネルギーがあふれる瞬間となりました。続くビンゴゲームでは、次の番号を心待ちにする子どもたちの期待に満ちた表情や、ビンゴが揃った瞬間の歓声が会場を盛り上げました。一体感のある雰囲気の中、子どもたちも大人も一緒に楽しむ時間となりました。

この第1部を通して感じたのは、子どもたち同士の自然な協力や励まし合いの場面。成功した友だちを称える拍手や、失敗しても互いに励ます姿から、思いやりやチームワークの大切さが伝わってきました。「やってみたい」「もっと頑張りたい」という積極的な姿勢も見られ、一人ひとりの成長を実感することができました。第2部では、表彰式が行われました。

各ユニットごとに名前を呼ばれるたび、子どもたちは照れながらも誇らしげな表情を見せてくれました。その表情には、努力が認められる喜びがにじみ出ており、自然と湧き上がる大きな拍手が会場を温かく包み込みました。その後の出し物発表では、各ユニットの子どもたちが練習の成果を披露。歌やダンス、寸劇など、どの演目にも独自のアイデアと工夫が光り、私たちも一緒に楽しむことができました。

子どもたちが見せる成長や個性の輝きに、職員一同、改めてやりがいを感じる瞬間となりました。クリスマス会の最後を飾ったのは、1年目職員3名によるスペシャルライブでした。このライブは、子どもたちだけでなく職員にも感動を与えてくれる特別な時間でした。音楽に合わせて自然と手拍子を打つ子どもたちや、一緒に歌う様子から、音楽の力で会場全体が一つになる瞬間を体感しました。

このライブを通じて、子どもたちや職員全員が「楽しむこと」の大切さを共有できたことが、何よりも印象深い出来事です。このような温かい時間をこれからも子どもたちと一緒に作り上げていきたいと感じました。子どもたちの成長や笑顔に触れたクリスマス会。今年もまた、心に残る素敵な時間を過ごすことができました。来年もさらに楽しいひとときを届けられるよう、準備を進めてまいります。

記：児童指導員 佐藤

2024.06.28

# 判断と行動を、チームの力に。

マニュアル研修／適切な判断と行動を身につける



6月28日(金)、職員を対象とした施設内研修を実施しました。本研修では、業務中に発生するさまざまな事案に対し、適切な判断と行動をとるための知識やスキルを学ぶことを目的としました。研修では、まずマニュアル作成の経緯や活用時の注意点について共有されました。施設内での対応において、事前に定めたルールや指針を理解し、実際の現場で活用できるようになることが重要であることが改めて確認されました。

また、実際に事案が発生した場合には、その場での迅速な判断と行動が求められます。しかし、一人で判断することにはリスクも伴うため、適切なタイミングで他の職員に報告・連絡・相談を行うことの重要性も強調されました。研修の後半では、グループワークを通じて実践的な対応を学びました。具体的なケースを想定し、どのような行動が適切かを話し合うことで、参加者同士が多様な意見に触れ、新たな視点を得る機会となりました。

研修を通じて、職員一人ひとりが冷静かつ的確に対応できる力を養うとともに、チームとして連携しながら対応する意識を高めることができました。今後も、より安心・安全な施設運営を目指し、定期的な研修を継続していきたいと考えています。

2024.11.18

# 一人ひとりを理解し、寄り添う。

子どもへの支援並びに障がい受容について




令和6年11月18日(月)、当施設では「子どもの発達障がいと支援の在り方」についての研修を実施しました。今回は、福祉型障がい児入所施設向陽学園施設長の安城一郎氏を講師に迎え、専門的な視点から貴重なお話を伺いました。研修では、発達障がいや知的障がいには先天的な要因が多く含まれることが説明され、子どもの特性を十分に理解した上で関わることの重要性が強調されました。

また、適切な声掛けや支援方法について具体的な事例を通じて学び、実践的な知識を深める機会となりました。さらに、母子手帳の役割についても取り上げられました。生後から就学までの健診記録や予防接種の履歴、成長過程を記録することで、子どもの発達の様子を客観的に把握できることが再確認されました。母子手帳への丁寧な記録が、子どもを支援する上での大切な手がかりになることを改めて学びました。

特に印象的だったのは、愛着障がいのある当事者の振り返りの中で、「特定の大人(職員)に甘えたかった」という言葉があったことです。施設では多くのルールのもとで生活するため、子どもたちが安心して甘えられる環境や関係づくりの重要性が再認識されました。また、子ども自身の障がい受容についての講話では、単に口頭で説明するだけでは理解が難しく、視覚的な情報や実際の体験を通じて受け入れることが効果的であることが示されました。

支援には長期的な視点を持ち、根気強く寄り添うことが重要であることも学びました。今回の研修を通じて、子どもを理解するためには多角的な視点を持ち、内面的な部分にも目を向けることが必要であることが再確認されました。今後も、子どもたち一人ひとりに寄り添いながら、安心して成長できる環境を提供できるよう努めていきます。

貴重なご講義をいただいた安城施設長に、心より感謝申し上げます。

2024.11.01

# 自分の歩みを、つなぐ。

ライフストーリーワークの理解と実践

## 「なぜ自分は生まれてきたのか」
## 「なぜ施設で生活することになったのか」

11月1日に、当施設で「ライフストーリーワーク」についての研修を実施しました。今回は、大阪府中央子ども家庭センター相談対応第二課課長池田かおり氏を講師に迎え、ライフストーリーワークの基本的な考え方や実践方法について、専門的な視点からお話をいただきました。今回の研修では、ライフストーリーワークの目的や進め方について丁寧な説明があり、実際の事例を交えながら、子どもたちに与える影響について多角的に考える機会となりました。

研修の冒頭では、ライフストーリーワークの基本概念について説明がありました。社会的養護を必要とする子どもたちは、自身の生い立ちについて明確な情報を持たないことが多く、家族関係や過去の出来事が断片的にしか伝えられていない場合があります。「なぜ自分は生まれてきたのか」「なぜ施設で生活することになったのか」「両親や兄弟との関係はどうなっているのか」といった疑問に対し、子ども家庭センターと施設が協力しながら、子どもの年齢や心理状態に配慮しつつ、計画的に情報を伝えていくことの重要性が語られました。

次に、実際にライフストーリーワークを進める際の具体的な手法について学びました。研修では、他施設での事例が紹介され、アルバムや記録ノートを活用しながら、子ども自身が視覚的にも理解しやすいようにする工夫が重要であることが示されました。また、言葉だけでなく、絵や写真、手紙などを活用することで、より受け入れやすい形で過去の出来事を伝えられることが説明されました。

特に、幼少期の記憶があいまいな子どもに対しては、断片的な情報をつなぎ合わせる形で伝えていくことが効果的であると話されました。

# 焦らず、少しずつ、ともに。

ライフストーリーワーク／職員の姿勢と実践

子どもが抱く感情を否定することなく受け止め、
共感しながら話を聞く。

ライフストーリーワークを進める上での職員の姿勢についても学びました。子どもが自分の過去を振り返る作業であるため、時には感情的に大きな負担となることもあります。そのため、子どもにとって心理的に安全な環境を整え、焦らずに少しずつ進めていくことの大切さが改めて確認されました。また、ライフストーリーワークを進める中で、子どもが怒りや悲しみを表現する場面に直面することもあります。

研修では、そうした場面における職員の対応についても学びました。子どもが抱く感情を否定することなく受け止め、共感しながら話を聞くことが何より重要であることが説明されました。過去の出来事を伝える際には、子どもがどのように受け止めるかを慎重に考慮し、必要に応じて専門家と連携しながら進めることが求められます。

研修の後半では、グループワークを通じて、実際の支援場面を想定しながら意見交換が行われました。「子どもが過去の話を拒否した場合、どのように接するべきか」「ライフストーリーワークを通じて、子どもが自分自身の人生を受け入れるためにはどのような関わりが必要か」といったテーマについて、各職員が自身の経験をもとに考え、活発な議論が交わされました。

子どもに過度な負担をかけることなく、寄り添いながら支える姿勢を大切にし、子どもが自分自身の人生を前向きに受け止められるよう、引き続き適切な対応を行っていきたいと考えています。今回の研修を通じて、ライフストーリーワークの意義や実践方法について、より深い理解を得ることができました。今後も、施設全体で子どもたちにとってより良い支援を提供できるよう、職員一同が学びを深めながら取り組んでいきたいと思います。

2025.01.30

# 子どもの声に、耳を傾ける。

子どもの権利擁護とアドボカシーの重要性




令和7年1月30日、「子どもの権利擁護とアドボカシー」に関する研修を実施しました。今回は、常磐会学園大学教授昇慶一先生を講師に迎え、子どもの意見表明権や、社会的養護におけるアドボカシー活動の意義について、具体的な事例を交えながらご講義いただきました。平成28年(2016年)の児童福祉法改正に伴う付帯決議では、「自分から声を上げられない子どもの権利を保障するため、第三者機関の設置を含めた実効的な方策の検討」が示され、社会的養護の分野での具体的な取り組みが求められるようになりました。

令和4年(2022年)の児童福祉法改正により、措置決定時や生活環境の変更時における子どもの意見聴取が義務付けられ、子どもの意見表明権を保障するための新たな事業が法的に位置付けられました。今回の研修では、本年度から制度化された「訪問アドボケイト」について詳しく学びました。訪問アドボケイトとは、外部の専門家が施設を訪問し、子どもたちが自身の権利や生活に関して自由に意見を述べる機会を提供する制度です。

これは、子どもたちが安心して相談できる環境を整え、自身の意思を表明できるよう支援することを目的としています。また、「子どもアドボカシー」という考え方についても説明がありました。これは、子どもが自身の権利を理解し、必要な支援を求めることができるようにするための取り組みであり、アドボケイトが子どもの声を社会に届ける役割を担います。

研修の中では、職員がどのように子どもたちと向き合い、彼らの意見を尊重するかが大きなテーマとなりました。子どもは自分の気持ちを表現することが苦手な場合が多く、大人の適切な関わりが不可欠であるという視点から、日々の関わりの中で意見を引き出す工夫が必要であることが強調されました。子どもの意見を否定せず、しっかりと耳を傾けることが大切であり、施設のルールや決まりを押し付けるのではなく、子どもと共に考える姿勢を持つことが求められます。

また、子どもが安心して意見を表明できる環境を整えることが重要であり、さらにその意見を適切な形で施設の運営や支援の在り方に反映させることの必要性も改めて確認されました。研修の最後にはグループディスカッションが行われ、各職員がこれまでの対応を振り返りながら、より良い支援の在り方について意見を交わしました。

「日々の業務の中で子どもの声を拾うために、どのような工夫ができるか?」というテーマで議論し、具体的な改善策を考える有意義な時間となりました。多くの職員が、子どもたちの意見を尊重することが自己肯定感の向上につながることを実感し、日々の業務の中でどのように子どもに寄り添いながら意見を引き出していくかを真剣に考えました。

本研修を通じて、子どもが自らの意思を持ち、それを伝える力を育むためには、施設職員が適切にサポートし、子どもに寄り添う姿勢を持つことが不可欠であることを改めて学びました。今後、次年度以降の制度運用をスムーズに進めるため、引き続き職員全員で理解を深め、子どもたちの意見を尊重しながら、より良い支援環境を整えていくことに努めていきます

# 温かなご支援に、感謝を。

寄付・寄贈のご報告

皆様のご厚意が、子どもたちの日々の暮らしを支えています。

橋本和久子 様

岡村正明 様

田邊正秀 様

株式会社 日本アクセス

有限会社 広新

渡辺望美 様

株式会社 FRAGRANCY

株式会社 アミバラ

株式会社 たくみ工芸

内海産業株式会社

松浦電機システム株式会社

日本レッグニット卸商協同組合

一般財団法人 播磨屋記念財団

ドミノピザ東大阪吉田店

株式会社 チュチュアンナ

大阪府遊技組合連合会

ワールドメイト

株式会社 しょうわ

全国シャンメリー協同組合

日本鏡餅組合

大阪本場青果卸売協同組合

マルハン中石切店

マルハン水走店

株式会社 サンフレバー

一般財団法人 H2Oサンタ

赤帽大阪府軽自動車運送協同組合

株式会社 万代

天瞳株式会社

岡本株式会社

一般社団法人 大阪府薬剤師会

三井住友カード株式会社

株式会社 フレーベル館

株式会社 クオンテックス

会見光宏 様

株式会社 FOOD＆LIFE COMPANIES

株式会社 あきんどスシロー

株式会社サティスファクトリー

一般社団法人 全国食支援活動協力会

餃子の王将 八戸ノ里店

餃子の王将 久宝寺口店

東大阪市社会福祉協議会

株式会社 Yom

デンタルプロ株式会社

株式会社たくみ工芸

久保熔接工業株式会社

協同組合 大阪紙文具流通センター

一般社団法人 日本生活文化推進協議会

有限会社 誠商会

田中啓子 様

三井敦史 様

引田青果

大阪府玩具・人形問屋協同組合連合会

協同食品株式会社

富山県新川ブロック農協青壮年組織協議会

西村真菜実 様

カレン優子 様

順不同、法人・団体名敬称略。掲載順・表記は原本に準じています。

AFTERWORD & INFORMATION

# 感謝を込めて、次の一年へ。

編集後記と巻末のご案内

本年度も「花園精舎施設だより」をお届けできることを嬉しく思います。日頃より温かいご支援を賜り、心より感謝申し上げます。皆さまからの寄付や寄贈品は、日々の生活の中で大切に活用させていただいております。子どもたちにとって、安心して過ごせる環境や、心豊かに成長できる機会は何よりも大切です。

皆さまのご厚意が、その支えとなっていることを改めて実感する一年でした。これからも、子どもたちが健やかに過ごせるよう、職員一同努めてまいります。本誌を通じて、少しでも施設の様子をお伝えし、ご支援いただいている皆さまに感謝の気持ちをお届けできれば幸いです。

引き続き温かく見守っていただけますと幸いです。今後ともよろしくお願い申し上げます。

広報委員会 一同


**発行元 / 広報委員会**

社会福祉法人 花園精舎
児童養護施設 花園精舎

照井道良（総務兼児童指導員）
川村拓磨（児童指導員）
佐藤充輝（児童指導員）


SHANAZONO2132

原本掲載のInstagramコード

**苦情申し出窓口**

社会福祉法人花園精舎では、子ども達が明るく元気に安心感を持って生活を送れる快適な環境作りのため、意見・苦情に応じられるよう体制を整えています。

| | |
|---|---|
| 苦情解決責任者 | 照井眞哉（施設長） |
| 苦情受付担当者 | 田中陽子（事務員） |
| 第三者委員 | 土井栄子 / 鈴木啓介 |
| お問い合わせ | 072-962-2132 |

# これからも、
# 子どもたちとともに。



**社会福祉法人 花園精舎**

〒578-0924
大阪府東大阪市吉田5丁目15番14号

TEL　072-962-2132
FAX　072-962-3610

h-seisha@air.ocn.ne.jp
https://www.h-seisha.com/